

国際歴史フォーラム解説書

17世紀の世界と大御所・家康 ―その時代背景を理解するにあたって―

黒澤 脩 著(静岡郷土歴史研究家)

I 大航海時代の日本

国際外交をリードした徳川家康

15世紀の中頃、世界随一の実力を持ったスペインやポルトガルが、新世界へ向かって小さな船と限られた技術を駆使して、イベリア半島の先端から大海原に船出した。そして地理上の発見が相次ぎ、大航海時代の幕が切って落とされた。その先駆けが、コロンブスのアメリカ大陸の発見(1492)や、バスコダ・ガマのインド航路の発見(1498)である。

この大航海時代(The Age of Great Voyages)の波紋が日本に押し寄せたのは、コロンブスのアメリカ大陸発見から半世紀後の天文12年(1543)である。このときポルトガル人は、日本の九州種子島に上陸して鉄砲を伝えた。徳川家康はこの前年、三河で生まれたばかりであった。

種子島に鉄砲が伝えられると、刀を作る優秀な技術を持った日本人は、たちまち模造品を作り、鉄砲は国内に広がった。戦術も一変し、天正3年(1575)の織田・徳川連合軍は、この鉄砲を使って武田勝頼軍を愛知の長篠(豊川の上流)で撃破した。鉄砲伝来からわずかに32年後のことである。

鉄砲の次がキリスト教である。フランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教を伝えたのは、天文18年(1549)家康が7歳のときであり、大村純忠や大友義鎮ら九州地方の戦国大名が入信した。

キリスト教も鉄砲と同様、すばやく日本全国に広まった。以後、日本人の物の考え方や行動も、新しい宗教によって大きく変わった。こうした環境で育った徳川家康は、やがて大航海時代の日本の主役となり、駿府大御所時代に多彩な外交を展開することになる。

幼少年期を今川家の人質として過ごした徳川家康は、織田信長や豊臣秀吉が果たし得なかった天下統一を為し遂げ、慶長8年(1603)に江戸幕府を樹立した。その2年後、息子秀忠を二代将軍に据えた家康は、駿府を大御所としてか

ら際立った国際外交を活発に開始した。

この駿府時代から日本が本格的国際外交をはじめ、ヨーロッパやアジア諸地域を巻き込んで行った。

駿府には、ヨーロッパ・東南アジア諸地域・朝鮮など多くの人物が去来し、駿府が重要な国際外交の舞台となった。

そんな駿府から、海外に雄飛した1人に山田長政がいた。

山田長政はシャム国(現在のタイ)のソントム国王に仕え、彼の活動はオランダ人のハンフリートの記録『17世紀に於けるタイ国革命史話』にも詳しく記されている。一つだけ付け加えて置くと、山田長政がシャムの王様ソントムに信頼され軍隊を統率していたことは、駿府で徳川家康に仕えて外交顧問となったウイリアム・アダムスに酷似していることである。

家康の駿府大御所時代は、年数から言えばたかだか10年足らずであった。ところがその中身は極めて密度の濃い時代である。具体的には、オランダ・イギリス・スペインの各国王使節が駿府を訪れ、現代の国際外交活動のようにダイナミックであった。この時代(17世紀)の国際外交は、想像を越えたおとぎ話の世界にも匹敵してロマンに満ちたものであった。

黄金の国ジパングと家康

この時代西洋から見た日本は、島国と言うよりは絶海の孤島として映る幻の空白地域である。彼らは日本を「黄金の国」(ジパング)と呼び、南極や北極と同様に極東と見なして彼らにとって地球上の謎の空白地帯であった。

そんな日本を紹介したのが、マルコ・ポーロの『東方見聞録』だ。ヨーロッパの人々は、黄金の国を探すため先を争って大航海の旅に出た。

冒険者たちの終着点は、当然日本であり日本を支配していた徳川家康の町「駿府」が彼らにとってはジパングの首都だった。マルコ・ポーロは『東方見聞録』でジパングの何を語って、ヨーロッパ人が何に刺激を与えられたのかを、その本から見てみよう。

「さて、私たちはインドの土地を説明することになった。そこではまずジパングの大きな島から始めよう。東方にあるこの島は、マンジ(Mangy)の海岸から1,500マイルの大海中にあり、非常に大きい。

住人は色白で、ほどよい背の高さである。彼らは偶像崇拝者であり、彼ら自身の国王を持っており、他国の王に従属していない。

そこには莫大な黄金があるが、国王は容易に黄金を島外へ持ち出すことを許さない。それ故、そこへはほとんど商人が行かないし、同じように、他所の船もまれにしか行かない。

その島の国王は大宮殿を所有している。その建物は、私たちの教会が鉛で覆われているように、すべて純金で覆われている。宮殿の窓は金で飾られ、細工が施されている。広間や多くの部屋の床には、黄金の板が敷かれ、その厚さは指2本ほどである。そこには小粒の真珠が豊富にあり、丸くて肉厚で、赤みがあり、値段や価値の点で、白い真珠よりもまさっている。その上に大量の真珠や宝石がある。このようにジパング島は驚くほど豊かである。」と記述し、また次のような恐ろしい記述もある。

「ジパングの住人は外国人を捕らえた場合、もし金銭で見受けされるならば、金銭と交換に彼らを解放する。もし身代金に値する代金が得られない場合は、捕虜を殺し料理して食べてしまう。そしてこの席には親戚や友人を招待し、彼らはそのような肉を非常に喜んで食べる。彼らは、人肉が他の肉よりもすぐれ、はるかに味がよいといっている」(マルコ・ポーロの『東方見聞録』)

『東方見聞録』に記されたジパング(日本)の情報は、ヨーロッパ人に「日本＝黄金の島」として伝えられた。その影響は計り知れない程に幻惑と魅力に満ちていた。実は、『東方見聞録』の黄金伝説以外にも、古代ギリシャやローマ時代に東洋に黄金の国があるという伝説があった。その黄金伝説が、具体的な形としてなって『東方見聞録』で紹介されたのがジパングである。

ジパングを求めて

ジパング(日本)を探すため、1492年(家康が生まれる51年余り前)コロンブスはスペインのフェルナンド国王とイザベル女王を説得し第1回の航海に乗り出した。ヨーロッパ人は未だに地中海世界に留まっていたが、遠い海(大西洋)に向かって行動を開始した。

コロンブスはその第一歩を踏み出した。コロンブスは大西洋を横切り、最初に到着した場所はカリブ海の1孤島(注)であった。ところが彼は最後まで「自分は日本(ジパング)の近くに到着した」と頑なに信じたままこの世を去っている。しかしスペインの宮廷にいたイタリア人ピエトロは、地球の大きさから推してもコロンブスがアジアに到着するはずがないと、ローマ教皇に書き送っているのが当時の地球感といえるだろう。

(注)コロンブスが最初に到着した島は、現在のキューバ近くの西インド諸島の1つ、サンバドール島であった。

コロンブスの探検によって、それまでヨーロッパ世界で地の果てとして軽視されていたイベリア半島の先端のリスボンの港と日本の駿府はこの時から宿命的に繋がっていたことになる。この間には広大な新世界(南北アメリカ大陸)と更に世界最大の太平洋があった。それでもヨーロッパの冒険者たちの船出は

休むことなく続いた。アメリカ大陸を横切り、太平洋を越えてジパング探しは続いた。地理上の発見も相次ぎ、中米メキシコのマヤやアステカ文化それに南米ペルーのインカ帝国との遭遇もあった。これらの背後には、「黄金の国ジパング」を探すという飽くなき夢があったからと言える。

1521年(日本暦で大永元年)メキシコのアステカ王国を滅ぼしたスペインは、この地域を「ヌエバ・エスパーニャ(新スペイン)」と呼びスペイン副王をここに置いた。この年は今川義元の父今川義親が活躍していたころである。ヌエバ・エスパーニャとは、現在のメキシコである。大御所時代には、「ノビスパン」とか「濃毘数般」また「能比須蛮」などと呼ばれ、家康外交文書もこの様に記していた。

スペイン人の日本進出は、メキシコ東海岸のアカプルコとマニラを結ぶ赤道海流を利用しての太平洋航路でつながっていた。家康はなぜか、このメキシコとの貿易に深い関心を示していた。

大御所メキシコ使節、太平洋を越える

慶長15年(1610)ドン・ロドリゴは、家康の船でメキシコに帰国した。家康がアダムズに命じて造らせた120トンの小帆船である。この船に家康は京都の商人で外国通の田中勝介と、それに22名の日本人船乗りを乗船させた。メキシコとの貿易振興のためである。これが「大御所派墨使節」のことである。「墨」(ぼく)とは「メキシコ」のことである。大御所時代の研究が日本側では大変遅れているため、こうした歴史的出来事があまり広く知られていない。ところがスペインやメキシコでは、徳川家康はよく知られているばかりか数々の論文も発表されている。

アダムズ造船のこの船は、1610年8月1日(慶長15年6月12日)に日本を離れた。行先はメキシコの西海岸のアカプルコである。約3ヶ月あまりをかけ、1月27日アカプルコに無事到着した。日本船としては、太平洋を横断した快挙である。22名の日本人の船乗りには、太平洋航路の航海技術を習得させる目的があり、田中勝介にはヌエバ・エスパーニャつまりメキシコの情勢視察(スパイ)の任務も加わっていた。こうして無事にドン・ロドリゴは帰国した。またアロンソ・ムーニョは、スペイン国王フェリーペ3世に家康の親書を提出した。国王への家康の土産は、8組の武具と刀一振りであった。

「大御所派墨使節」が再び駿府に帰国したのは、慶長16年(1611)であった。

(注)商人田中勝介以下22人の「大御所派墨使節」は、鉱山の精錬法をはじめ、スペインの先端技術を駿府に持ち帰ったとも伝えられているが、定かではない。

スペイン国王使節ビスカイノ、駿府へ

アダムズ造船の船がメキシコに渡ってから約1年後の慶長16年(1611)スペイン国王フェリーペ3世は、駿府の家康のところにセバスチャン・ビスカイノ大使を正式に外交官として派遣した。ドン・ロドリゴらが日本の船を造り、彼らが無事に帰国できたお礼のためというのが表向きの目的である。探検家でもあったビスカイノは、アカプルコから日本に来る航海で、通常のマニラ経由を選ばず、アカプルコから直接太平洋を横断して関東の浦賀の港に直行し人々を驚かせた。(この時の船はアダムズ造船の船ではなく、アカプルコの極東艦隊の船であった)

田中勝介と22名の日本人も帰国した。ビスカイノの本当の来日の目的は別にあつた。それは日本海付近にあると伝えられていた「金銀島」の発見や、スペインが将来日本を侵略するために、日本の島や港として使える場所を測量することであつた。1611年6月22日(慶長16年5月12日)、江戸で将軍秀忠にビスカイノは謁見した。その後の7月4日に駿府に到着し、翌日に家康に謁見した。

ビスカイノと家康との会見は友好的なものであつた。ところがこの時期は、キリシタン問題が重大な局面を迎えていた。そのため家康のスペイン人に対する態度は日々冷却していく最中でもあつた。ビスカイノが日本に失望してゆく様子が、彼の著書『ビスカイノ金銀島探検報告』に詳しく書かれている。その前に、家康との会見の様子から見てみよう。

ビスカイノ、家康に謁見

キリシタン問題が不安な要素を持っていたときだけに、ビスカイノ一行が駿府に到着したときには、駿府の信者たちはとても喜んでこれを迎えている。ビスカイノと一緒に帰国した田中勝介もキリシタンの一人で、洗礼名をドン・フランシスコ・デ・ベラスコと名乗った。彼は一足先に駿府に戻り、メキシコからの帰国報告を家康に行った。ビスカイノ一行が駿府城に家康を訪問したのはその直後である。ビスカイノはこのとき、「日本諸国諸州の皇帝閣下」と題する国王の書簡を家康に手渡した。まずビスカイノの記録から見てみよう。

「10時頃、大なる駿河の市(駿府)に着きたり。到着する前、既に貴族となり殿の寵を有するドン・フランシスコ・デ・ベラスコ(田中勝介)が多数の供を連れ、宮中の他の貴族1人と共に大使を出迎へたり。我等は宮殿(駿府城)より

遠からざる甚だ家屋に宿泊せり。皇帝は直ちに使者を遣わして大使に歓迎の辞を述べ、長途旅行の疲労を休むべく、またその来着を喜び、書記官(本田正純)をして後に通知せしむ旨を大使へしめたり」(同書)。

彼の記録によると、田中勝介がビスカイノを迎えるために、駿府の街外れに向いて一行を大歓迎したことが記されている。また、駿府城が世界でも巧妙なほど優れた名城であると指摘し、駿府城の広さはメキシコ市の住宅地全部の2倍だと記した。このことは、おそらく、現在のメキシコ市の中心部にある「ソカロ広場周辺」から想像したものだろうか。

家康との接見の儀式が整うと、彼らは駿府城内の御殿に向かった。ビスカイノは、たくさんの品々を家康に献上した。日本側の記録によれば、時計・カップ上下反物・ブドウ酒(白ヘレスと赤ブドウ酒)・鷹具・靴・金筋・南蛮絵である(『方物到来目録』)。このときの時計は、久能山東照宮に現存されているものである。

また南蛮絵とは、国王フェリーペ2世と王妃ならびに皇太子の肖像画3枚で、家康はこの絵をじっと眺めたという。ところがこの南蛮絵は現存していない。面白いことに本田正純は、献上物の「受取状」を発行している。外国人から一切の品物を受け取らなかった本田正純は、このときだけは珍しくビスカイノから「ガラス製品」と「石鱈」をもらい大変喜んで何度も何度もお礼を言って受け取った。しかし彼は、「これは自分がもらうのではなく、大御所様に使用してもらう」と述べたためビスカイノも感心した。

そこでビスカイノは、「彼は潔白且忠実にその職に尽し、君なる国王に仕えて怠ることなく、その扱う所の事務に付、常に偽なく陳述す」(同書)と感銘深く記した。

一方の家康の重臣である後藤庄三郎については対照的である。彼に品を出すと「羅紗その他の品を贈りしが、この人は躊躇することなくこれを受納せり」(同書)と記している。

このほかにも後藤庄三郎については、彼がイギリス国王使節が来たときにも土産を遠慮なくもらっており、同様なことをイギリス国王使節のジョン・セーリスも記録していた。後藤庄三郎が欲深なことが、400年以上も経った今でも記録に残ってしまったことになる。

日本沿岸の測量と家康の不快

ビスカイノは家康に日本沿岸の測量の許可と、また日本で新たに船を造船して再度来日したいことや、自分たちが持ってきた商品を自由に販売させて欲しいことなどを願い出ている。家康はビスカイノの船の修理には、木材その他を

安い値段で与える約束もした。本田正純からは貿易許可も受け取り、日本の測量許可も許した。ビスカイノは、仙台の伊達政宗の知遇を得るなどして、日本各地でも測量を続けた。

それからビスカイノは、黄金の国ジパング周辺の金銀島探検の後で帰国しようとした。ところが暴風で船を大破させてしまった。このため再び浦賀に戻り、修復を家康に願い出た。ところが、家康の外交顧問のアダムズは、ビスカイノに港湾の測量や日本沿岸の測量をさせることに強く反対した。理由は、スペイン人の日本を植民地化するための事前調査であり、こうしたことは大変危険だと訴えたのである。

家康は、ビスカイノやその他のスペイン人の行動に不信感を募らせ、ついにスペイン人に対する態度は急変した。家康の外交政策が、オランダ人やイギリス重視に傾いていくのもこの頃からである。ビスカイノはメキシコへ戻る船を新しく造るため援助を求めたが、家康からは断られている。そこで彼らはソテロを伴って、奥州の伊達政宗に接近することとなる。

スペイン外交の終焉

ビスカイノは、「事の始は良好なりしが、終は宜しかざりき」(同書)とも言い、また「日本人は世界における最も劣悪な国民」(同書)と厳しい非難を浴びせた。このため慶長17年7月22日付のスペインとの通商に関する書簡は形式的で実態のないものに終わった。ビスカイノは、オランダ人たちは、家康の心を引くため贈物攻勢をかけて機嫌を取っていることや、アダムズの中傷も記している。そのためか、家康の面前で再び疑惑を晴らそうと試みるが、弁明の機会すら与えられなかった。結局ビスカイノは、1613年、伊達政宗が支倉常長とルイス・ソテロを「慶長遣欧使節」としてメキシコに派遣した機会に同じ船で帰国した。

ビスカイノの後にも、スペインからは2人目の大使デイエゴ・デ・サンタを駿府城の家康に派遣したが会見すら実現できずに帰国した。

皇帝と呼ばれた駿府の家康

家康は、将軍を引退して駿府城に移った。この家康が、駿府で単なる「隠居生活」をしていたと考えたらそれは大きな誤解である。それは、徳川幕府の実力と威信を世間に見せつけるための「幕府の作戦」であった。家康は駿府城を舞台として、徳川幕府の延命作戦を練り実行した。

強力な頭脳集団(シンクタンク)と、具体的作戦を実行可能とする行動集団(ドウ

タンク)からなる強力な「大御所スタッフ」を配置して任務を忠実に遂行させたのである。

諸外国の使節から皇帝と呼ばれた大御所家康を、「隠居」と見ていた外国人は一人もいない。むしろ駿府城で睨みを効かせ、二代将軍秀忠よりも強い権力を持ちながら諸大名や公家をも統制下に置いた。

こうした駿府の家康を、諸外国の使節や宣教師それに商人たちは「皇帝・日本皇帝・日本国王・内府様(だいふさま)・大御所・閣下・大皇帝・殿下・上様・天下殿・日本国大君・将軍・大將軍・国王・大王」などと様々に呼んでいた。家康の言動は国内ばかりか、国外に対しても影響を与えた。家康の国際外交の広がり、ヨーロッパや東南アジア諸地域に加え、太平洋の彼方のメキシコにまで広がっていた。

ところが、「駿府大御所時代」の出来事やその実態は、残念ながら現在の私たちの住む街角からはとても実感として伝わってこない。しかし、ひとたび海外の古記録や宣教師の古記録に目をやると、想像を絶する大きなスケールで大御所時代の事柄が光り輝いているから不思議である。

外国人の見た家康

当時来日していた外国人や宣教師、それに商人たちは家康の身の出来事を刻一刻と自国に伝えていた。駿府から発信された家康周辺の出来事の幾つかを外国人の記録から拾ってみよう。

(1) アビラ・ヒロンの記録

「日本の領主たちは、彼らがすでに年老いたり、自分の子供たちが成人になったりした時、隠居する習慣がある。これは領主の地位をやめ、剃髪して統治を相続者に委ねる事である。しかし、今この国の国王(徳川家康)は、この流儀に反している。現に王子(秀忠)はすでに35歳を越える大人であるが、依然として国王自ら統治しているからである(日本王国記)。

(2) ウィリアム・アダムズの書簡

「家康はわたしに、セーリスが日本に来たことの目的のひとつは、さらに北西もしくは北方地域の発見であったのではないかと尋ねた。わたしは、われわれの国は依然としてそれらの地域発見のために巨額の金を費やすことを惜しんではいないと家康に伝えた。家康は、北西または北東航路はあるかどうか、またあるとすればそれが近道になるかどうかわたしに尋ねた。そこで、われわれはきっと航路があり、それが間違いなく近道になることを確信していると、わたしは答えた。その時、家康は、世界地図を持ってこさせ、わたしたちの言ったとおり実際に非常に近いことを確かめた…」(アダムズの書簡)

大航海時代を意識した街造り

家康は駿府を大御所の地と決めると、想像を絶する発想の「城」と「城下町」の壮大な計画を持っていた。それは、「大航海時代」を意識した都市計画(設計)で、外国船(ガレオン船)が長崎や平戸だけでなく、ここ駿府城下にも投錨できる港の建設である。家康は「駿府」に大船を接岸させ、ここを日本の国際的外交の拠点にしようと考えた。このことについては、ウイリアム・アダムズの記録を辿っていくと興味ある指摘と一致する。それは、従来の港(長崎や平戸)よりも、イギリス人のためには関東や浦賀あるいは駿府も候補地になっていたと思われる点である。理由は、スペイン人やポルトガル人と競合させないほうが得策と考えて関東や東海を意識したことが記されている。また、平賀や長崎は江戸や駿府に来るのには遠くて不便であったことも理由の一つである。

そのためアダムズは、「国王陛下の城に近い日本の東部、つまり北緯35度1分辺りが良い」と考え、イギリス国王の使節セーリスにも商館の設置場所をこちらに薦めていた。

江戸の町は北緯36度にあることから、自分の領地のある三浦半島逸見がアダムズは視野に入れていたことになる。駿府は安倍川の脅威によって、家康の計画は変更となったからである。しかし、江尻(清水)ということもアダムズの記録にはでてこないのが気にかかる。

家康が夢見た幻の「駿府城」と駿府城下町とはだいたいこんな計画であったと考えられる。

それは安倍川を大改修し、運河で駿府城と浄化を結び天守閣の真下にヨーロッパ諸国からの船を着岸させるといった壮大なものであった。それが、幻の「川辺を拠点とした城と城下町の建設構想」である。

しかしながら、安倍川の流れは時として「暴れ水」となり、実現不可能ということで現在の場所となったのが大方の経緯と想像できる。

確かに、大御所時代の諸外国からの外交使節の記録を覗いて見ても、日本の政治と外交はこの駿府を中心としてシフトしていた。すると「川辺計画」も実現しなかったとはいえ、アダムズや家康の指摘は示唆に富んでいた。

アダムズの記録をもう一度正確にみてみよう。

「日本の東部・北緯35度1分で、ここに国王陛下の城があります。もし我が国の船がオランダ人のいる平戸に来れば、そこは幕府から230リーグ(1リーグは4.8キロ)も離れており、その間の道は退屈で不潔です。江戸の町は北緯36度であり、この地の東側はいくつかの最良の港があります。沿岸は開けていて、本土から2分の1マイル沖まで浅瀬や岩は一切ありません。

もし船が東のほうの海岸に来れば、私を訪ねてきてください。私は日本語で按針様と呼ばれております。この名前で、私は沿岸の全ての人々に知られております。本土に近づいても心配は全くありません。なぜならあなた方をどこでも好きな場所につれていってくれる水先案内人の小帆船がありますから。船がここに来たとき、あなた方の会社の働く人々と混じって、私も皆様の満足のいくようお仕えできることを切望しております」(『日本に来た最初のイギリス人』幸田礼雅訳より)。

ウィリアム・アダムズ

大御所家康の国際外交を支えた人物にウィリアム・アダムズがいた。家康がアダムズと出会うことがなかったら、家康の国際外交は大きく変質していたに違いない。日本とオランダとの国交は慶長14年(1609)のオランダ国王使節の来日に始まる。このきっかけを作ったのはアダムズだ。また日本とイギリス両国の橋渡しをしたのも彼であり、最初のオランダやイギリス外交にアダムズが果たした役割は大きい。ここでは日本に初めて来たイギリス人、ウィリアム・アダムズが来日し、家康と関わった経緯から見てみよう。

彼の出生の記録が、ロンドンから東に約50キロ離れたケント州ジリングムのマリー・マグダリーン教区教会に残されている。アダムズは1564年9月24日のシェイクスピアと同じ年に、この町で生まれた。

16世紀のイギリスは、女帝エリザベスが即位し(1558年)、イギリスの産業や貿易が盛んになり、イギリス海軍が光り輝いたエリザベス朝時代である。イギリスが大英帝国へと進む栄光へのスタートの時代であった。エリザベス女王は、オランダの独立を支援しスペインに反発を深めたため、これに反発したスペインは1588年スペインが世界に誇っていた無敵艦隊をイギリスに進撃させた。

イギリスがこの無敵艦隊を撃破したことによって、イギリスやオランダがスペインの制海権を奪い取り、世界進出に躍り出た。アダムズの生まれたこの時代は、イギリスが世界的規模で動き出し、スペインとポルトガルに代わって世界中に羽ばたいた時代であった。そんなころにアダムズは、リーフデ号で日本に向かった。

リーフデ号の漂着

アダムズはエリザベス女王陛下の艦隊に所属し、イギリス軍が誇るドレイク艦隊に加わった。そしてリチャード・ダーフィルト号(120トン)の艦長とし

て、1588年の無敵艦隊との戦いで、彼は部下の船員70人とともに戦った。イギリス軍が勝利すると彼はオランダのロッテルダムの商社が募集する「東洋艦隊」(5隻の船団)に就職して、「デ・リーフデ号」(以下「リーフデ号」)の航海長となる。

アダムズはエリザベス朝時代の著名な船乗りとして知られたホーキンスやドレイク、それにラリーなどの冒険者とは一味異なった冒険の世界に足を踏み入れた。その結果が地球の反対側の日本にたどり着き、徳川家康の外交顧問として不思議な世界に入り込むことになる。こうした彼の運命は、オランダの港を出帆したときから始まった。

アダムズの船団は、最初から逆風に苦しみながら大西洋を南下した。喜望峰回りの予定を変更し、マゼラン海峡まで5ヶ月を費やしている。氷雪と寒気に加え、複雑な地形に翻弄され座礁するなど生き地獄の辛苦をなめて、船は太平洋に入った。ところが南太平洋上でも暴風雨や嵐に見舞われ、仲間の船とばらばらとなった。ある僚船は沈み、ある船は難破した。ある者は原住民に惨殺され、アダムズの弟も命を落としている。

航海士アダムズの操るリーフデ号は、チリの海岸に面したセント・マリヤ島から、日本に漂着するまでに4ヶ月と22日を要した。最悪の航海であったことを、アダムズは本国に手紙(『アダムズの未知の同胞並びに知友に送りし書簡』)を出している。リーフデ号は、九州大分(臼杵)に漂着した。正確には、佐志生の黒島といわれている。漂着したとき乗組員101名のうち、生存者はわずか24名だけであった。しかも満足に立って歩けたのは、アダムズとそのほか6名という。生き残りの24名のうち3名は、日本人に救助されたその翌日に飢えと衰弱で死亡した。1600年4月29日(慶長5年3月16日)のことである。

家康、アダムズを召喚

リーフデ号は波間に揺れ動く無人船か、あるいは幽霊船のようであったという。見慣れぬリーフデ号の漂着は、たちまち噂となって広がり家康の耳にも届くことになる。家康は、早速アダムズを大阪城に呼び寄せ、航海の様子や来日の目的などを聞き質した。家康にしてみれば、関ヶ原の戦いの間際の忙しいときでもあった。

スペイン人やポルトガル人は、厄介なイギリス人とオランダ人がこのとき初めて来日したことに焦った。イギリスとオランダは、彼らの敵国だったからである。英語やオランダ語を話すものがないため、結局家康はスペイン人やポルトガル人たちに通訳させた。しかし彼らは正しく通訳するどころか、アダム

ズたちを海賊としてただちに処罰ないし処刑するよう、家康をたきつける始末であった。この結果アダムズは囚人たちの獄舎に投獄され、散々ひどい目に遭ったという。

家康はスペイン人たちの姑息な通訳で、真実が覆い隠されていることを見抜かないはずがなく、正しく通訳することを厳命し再度アダムズに聞き質した。こうして、前後3回アダムズを召喚すると、アダムズの話に興味を持った家康は彼を解放したばかりか、リーフデ号を堺に呼び寄せ関東にも回航させた。

この時家康は意外なところに注目した。リーフデ号の積荷である。5百艇の火縄銃、5千発の砲弾、3百発の連鎖弾、それに5千ポンドの火薬などみな家康の目に留まった。どれも世界最新鋭の軍備を整えていたことを家康は見逃さなかった。この時は日本を二分して争う関ヶ原の合戦の前夜だけに、やすやすとスペイン人やポルトガル人の口車にそそのかされて、アダムズを手放すほど単純な家康ではない。

家康は関ヶ原の合戦のとき、リーフデ号の先端兵器を活用したという記述もある。アダムズとの会見で、家康は彼の人格と能力を見抜いた。彼はそれまでのスペイン人やポルトガル人とは異なる人種であり、家康はオランダやイギリスとの外交や貿易の重要性もすでに視野に入れ、アダムズと接したのだ。

家康の目的はアダムズを徳川政権の枠組みに取り入れ、外交・貿易・技術などの顧問(=パイロット)として厚遇し彼のノウハウを生かすことにあった。当時のパイロットといえ、今日のスペースシャトルのコックピットの船長に相当する能力の持ち主だ。

破格の待遇を受けたアダムズ

アダムズが破格の待遇を受けていたことは、彼が本国に送った書簡の中で次のように述べていることからわかる。

「私は現在皇帝(駿府の家康のこと)のために奉仕し、日々の勤めを果たしているので、彼に私は知行を賜った。それはちょうど英国の大候にも比すべき、81人から91人ほどの農民が私の奴隷か従僕のように私に隷属しているのである。このような支配的地位は、この国ではこれまで外国人に対して与えられたことが無かった。神は私の大きな災厄の後にこれを与えてくださったのである。」(『日本に最初に来たイギリス人』より)。

オランダ国王使節が江戸に参府した際、逸見の按針屋敷に宿泊した。そのときの記録にも、「彼(アダムズ)は、この領主や王候たちも、とうてい受けることがない程の厚遇を皇帝から受けている。

彼はすこぶる元気で、また経験に富み、きわめて実直な男だからである。彼

はしばしば皇帝(駿府の家康)と言葉を交えるし、いつでもその前に近づくことができる。これほど寵遇を受けている人はごく少ない」とあり、一様にびっくりしていた。アダムズを顧問としたことによって、家康はそれまで以上に遠い海の彼方の国々へと視野を拡大していく。当時の世界情勢もかなり正確に理解し、スペインが誇る無敵艦隊がイギリスに敗れた事で、世界の権力地図が大きく塗り替えられたことやイギリスやオランダが新たに東洋を目指して進出していること、それにキリスト教にもカトリックだけでなくプロテスタントの存在があることなど、当時の世界情勢をかなり正確に理解していた。

「北方航路」を発見せよ

当時ヨーロッパの国々では、マゼラン海峡や喜望峰を通らなくてもヨーロッパから日本に直接行くことが出来る「北方航路」なるものが真剣に検討されていた。現実には存在しないが、イギリスではジェームズ国王がこのルートを探すことを命じていた。アダムズもノルウェー方面を探検し探したこともあった。またイギリス使節として来日したジョン・セーリスなどにも命じていた。

そこでアダムズは家康がもしこの北方航路を発見すれば、家康が世界の支配者になれるだろうと進言し、北方航路発見のため日本では手に入りにくい航海に必要な品物リストを提出して、それらを家康に揃えることを要望したという。具体的には次の物である。網具類、帆船の布、婚指、松脂、羅針盤、砂時計、説明用地球儀1対、世界の海図または世界地図若干枚数(『アダムズの手紙』より)。

以下の品物を調達するよう家康に要望したアダムズは、次のような記録を残している。「若し閣下(家康)が、予に此等を供給せらるるならば、神助により、予が此の如き名誉ある勤務を怠るものに非あらざることを承知さるべし」(『慶元イギリス書簡』より)このようにアダムズは、自信に満ちてこの計画達成が可能であることを家康に伝えた。そのために家康は、蝦夷の松前藩に紹介状を送り、アダムズに協力させたという。

宣教師が伝える家康の動向

宣教師たちは、豊臣秀吉が亡くなると家康の存在に注目した。スペインのフィリピン総督ドン・ルイスが新しく総督となると、テリョに家康のことをこう伝えている。「関東の国王家康は、関白(豊臣秀吉)を除いては日本最強の諸国王の1人で、全国の統治と主権において関白の後継者になるであろう」また、日本に来た司教ルイス・デ・セルケイラがイエズス会に送った書簡では、

こう述べている。

「全日本の支配者である内府様(家康)は、キリスト教を好まない。内府を始め、異教徒の大名たちは、太閤と同様に、ルソンやメキシコのスペイン人は、他国を侵略するものだとは固く信じている。サン・フェリーペ号の船員たちが言ったように、布教は侵略の手段に過ぎぬと思っている。ただし日本の諸侯は、日本の武力について自負心を持って居り、他国から侵略されることはなく、むしろ他国を征服できると思っている」

また、慶長14年(1609)12月に、駿府城で諸大名と謁見の際に同席したスペイン人ビベロ・イ・ベラスコは、大御所家康のことを次のように記していた。「いかにも大物らしい大名が謁見の間に入ってきた。その位がどれほど高いかは、たずさえてきた贈答品を見れば、一目瞭然であった。金銀の延べ棒と絹の小袖、その他もろもろを概算すると2万ドゥカド以上の価値があると思われた。贈答品は最初いくつかの台の上に載せられてあったが、皇帝(家康)は目もくれなかったように思う。この殿は家康閣下の玉座から百歩以上離れた所にひれ伏し、床に接吻するつもりかと思われるほど首を深く垂れていた。誰一人この殿に声をかける者はなく、殿もこの部屋に入る際に目を上げて皇帝の顔を見るようなことはせず、やや大勢の従者を引き連れて御前を退出した。私の従者たちの話だと、随員の数は3千人(31人の誤りか?)くらいだったということである」(『通辞ロドリゲス』マイケル・クーパー著より)。

II 駿府から始まったキリシタン信徒迫害

ビスカイノとジュリアの出会い

「キリシタンを迫害する悪皇帝(徳川家康)に相当の報いを与え給え。何となれば、彼の政治を行ふ間は善き事を行なふの望みなきが故なり」(『ビスカイノ金銀島探検報告』)このように、外国人にうらまれた家康の駿府大御所時代の記録は、残念ながら国内にはあまり存在しない。しかし生死を賭けて来日したキリシタン宣教師らの記録は、海外に数多く残されていることが最近の研究でわかってきた。それらの記録から、「駿府のキリシタン」を取り巻く当時の環境を検証してみよう。

駿府にキリシタンの信仰がいつ入って来たかは明らかではない。慶長2年(1597)ごろからはすでに始まっており、駿府市街と安倍川付近に南蛮寺(教会)が2か所あったといわれている。

慶長17年(1612)の「日本全国布教分布図」(山川出版『日本史』所収)によ

ると、駿府の教会設立は江戸より早いことがわかる。駿府におけるキリスト教の布教は、当然それ以前であることは明白だが、資料に登場するのは、慶長12年(1607)閏4月にイエズス会の宣教師パジェス一行が駿府城で家康に拝謁したとき、駿府と江戸での布教を願い出たのが最初である。(『パジェス日本邪蘇教史』)

しかしこれより先、すでにフランシスコ派のアンジェリスが駿府で開教しており、一ヶ月に240名余の信者が洗礼を受けていた記録もあるという。

こうした時期に、先に述べたスペイン国王使節セバスチャン・ビスカイノが来日し、駿府城で家康に謁見した。皇帝家康と無事に謁見が済むと、ビスカイノは宿に帰った。遠い異国から来たビスカイノに会うために、キリシタン信者たちだけでなく家康の息子(義直・頼直・頼房)らをはじめ多くが訪れた。連日、異国の話を聞きに来る者が大勢いたという。それは慶長16年(1611)のことで、このとき駿府のキリシタン信徒たちの熱狂的な歓迎を受けたことが彼の記録に次のように記されている。

「我々は旅館に帰りしが、同所に皇帝の宮中の婢妾女官と称する方可なるジュリアといふキリシタン大使を訪問し、ミサ聖祭に列せん為め待ちいたり。この婦人を歓待しガラスの玩具その他の品を与へられしが、その態度これを証明すと思はれたり。(駿府の)日本人のキリシタン多数、大使に面会し、またミサ聖祭に列席し教師等に接して慰安を得ん為めに来り。彼等より好遇せられしこと、及び他の人々が我等の正教の事を聞き、此処に述べず。この事は実に嘆賞すべきことなりき」(『ビスカイノ金銀島探検報告』)

大奥の侍女でキリシタン信者であるジュリアがビスカイノに、「ミサに同席させて欲しい」旨を願い出たのである。駿府は、この時点では信者にとっても平和な信仰の地でもあったが、やがて迫害の嵐が吹き荒れる前夜でもあった。

岡本大八事件とキリシタン弾圧

徳川家康の「キリシタン禁教令」は、慶長17年(1612)に発布された。正式名は、「伴天連追放之令」という。初めは、駿府より幕府直轄領に布告され禁止されたものであった。京都の教会を破壊させたものもこの時期と一致している。発端は、本多正純の寄力であり洗礼名パウロと呼ばれた岡本大八が、肥前のキリシタン大名有馬晴信を欺くために、大御所家康の朱印状を偽造したことが発覚したことによる。大八は慶長17年(1612)3月、駿府市街を引き回しの上、安倍川原で火刑に処せられる前に、拷問に耐えかねて駿府の主なキリシタン信者の名前を白状し、多くの関係者が捕らえられている。有馬晴信も、同年5月に家康の命によって処罰された(『当代記』)。

キリシタン信者の実態調査の命令を受けた駿府町奉行彦坂九兵衛がさっそく取り調べると、家康の周辺に多くのキリシタンが取り巻いていることが露見した。その中には、家康の鉄砲隊長、原主水もいた。

のちに捕らえられた原主水は江戸に引き回され、元和9年(1623)12月4日の朝にキリシタン50名とともに処刑された。このとき、諸大名を前にして処刑したのは彼らに対する見せしめのためであった。フランシスコ・ガルベス神父やアンジェリス神父も同時に処刑されたが、彼らの遺骸が信者によって一晩でどこかへ運び去られたことは有名な話である。

アビラ・ヒロンの指摘

アビラ・ヒロンは、『日本王国記』の中でキリシタン信徒および宣教師が、徳川家康によってどんなに迫害されたかを記し、ウイリアム・アダムズによって始まったと、次のように厳しく指摘している。

「この王国(日本)で難破した船の水先案内人であったイギリス人が造った小帆船で、1610年、ドン・ロドリゴはメヒコ(メキシコ)に向け出船した。このイギリス人はアダムズといい、われらの主とキリシタン宗徒たちに不利になるでたらめごとを国王(家康)に告げ口して、われわれをひどい目に合わせたのである」。

アビラ・ヒロンのほかにも、駿府でのキリシタンの平和な時代や、あるいはそれから一転し、迫害へ進んだ事実を目撃した外国人は大勢いた。やがてこの弾圧が、幕府直轄領だけでなく全国的に広がっていったのが翌年慶長18年(1613)であった。このときの「伴天連追放之令」は、金地院崇伝の手によって江戸で一夜の間に起草されたものである。

キリシタンの鏡・ジュリア

ジュリアのことをアビラ・ヒロンは、こう記した。「(駿府城)大奥の侍女ジュリアも追放し、僅かの漁夫しか住まない無人の島、八丈の島に送った。ジュリアは、今ではその島で厳しい労働と貧困に耐えている。」駿府城大奥の侍女として仕えたキリシタン女性の消息を、いち早くキャッチしていたのには驚く。

ジュリアの出生は明らかではない。前述したように、秀吉の命令で朝鮮に出兵したキリシタン大名の小西行長が、戦乱で苦しむ朝鮮貴族の少女(絶世の美女という)を養女として日本に連れて帰ったとする説が有力だ。この少女がどうして大奥の侍女として、特に駿府城内で生活することになったのかは謎である。おそらく関が原の合戦で滅びた小西家の養女であったことから、何らかの縁で

駿府城大奥の侍女になった可能性は高い。

『日本キリシタン殉教史』もジュリアのことをこう報告している。ジュリアが外国人の記録に初めて登場したのは、ジョアン・ロドリゲスの『日本年報』であった。それによると、「公方様(徳川家康)の大奥に仕えている侍女の中に数人のキリシタンが居て、前にアグスチノ津の守殿(小西撰津守行長)の夫人に仕えていた高麗生まれの人がその中にいる。彼女の信心と熱意とは、たびたびそれを抑制させねばならないほどで、多くの修道女に劣らないものである(中略)高徳のこの女性は、昼間は大奥の仕事で忙しく異教徒たちの中にいるので、夜の大部分を靈的読書と信心に励んでいる(中略)そのため、誰にも知られないようにうまく隠した小さな礼拝堂を持っている(中略)またたびたび知人w p訪問するという口実で許可をえて、教会に来て告白し聖体を拝領する…うら若い女性で、あのような環境の中で、『茨の中のバラ』(讚美歌)のように純潔で、自分の靈魂を損なうよりも命を据える決意を固めている」

この史料からすれば、ジュリアの出自はやはり朝鮮とみて良いであろう。アロンソ・ムーニョも彼女のことをマニラ管区長にこう報告した。

「皇帝の宮廷(駿府城)にいる一女性は、キリシタンたちの間でドーニャ・ジュリアと呼ばれ、信仰深く、慈悲の模範になっている。貧しいキリシタンたちを訪ねては多くの人々に食物を施している。たびたび教会に来て熱心に聖体を拝領している。迫害が始まったことを知ると、教会に来て告解と聖体拝領をした。遺言書や必要な準備をし、所持品を貧しいキリシタンに分け与えた。將軍(家康のことか)が欲求のまま呼び出して侍らせる妾ではないかと思われたので、神父は、はじめ聖体を授けようとしなかった。(するとジュリアは)『もしそんなことがあったら、私はそこから容易に逃げ出せます。それができないようだったら死を選びます』と彼女は言ったという。この女性は大奥にあってつねにキリシタンとしての態度と、信心を保ち、われわれが同宿を必要としているのを知ると、自分が養子にしていた12歳の少年を同宿として教会に行かせた」(『日本キリシタン殉教史』)。

慶長17年(1612)のキリシタン禁令によって、ジュリアは最初は大島に島流しとなり、さらに伊豆の孤島(神津島)に流された。慶長19年(1614)のキリシタン年報には、セバスチャン・ウィエイラの記録として、ジュリアが神津島に送られた様子が伝えられている。ウィエイラが果たしてジュリアが流された場所まで連絡をとることができたかどうかは疑問だ。

ウィエイラの記録は殉教を美化した創作という説もある。また『日本殉教者一覽』の中にジュリアの名前はない。このことは彼女がキリシタン信者として処罰されたのではなく、流刑の罪状を「スパイ容疑」として島流しとなったという説もある。巷間では、ジュリアに心を寄せていた家康が、島流しならいずれ

改心して駿府に改心して駿府に帰ってくるだろうと考えたとする見方である。ところがジュリアは神津島で心安らかな信仰生活を続けて、そこで亡くなった。

イギリス国王使節の見た、駿府の迫害

慶長18年(1613)12月に発布された「伴天連追放之令」は、キリシタンに決定的な打撃を与えた。この年来日したイギリス国王使節ジョン・セーリスは、駿府郊外の安倍川でむごたらしいキリシタン信者の死体の山を目撃し、その様子をこう記した。

「予らが、ある都市に近づくと、磔殺された者の死体と十字架とがあるのを見た。なぜならば、磔殺は、ここでは大多数の罪人に対する普通の刑罰だからである。皇帝の宮廷のある駿府に近くに来たとき、予らは処刑されたたくさんの首をのせた断頭台を見た。その傍らには、たくさんの十字架と、なおその上に縛り付けたままの罪人の死体とがあり、また仕置きの後、刀の切れ味を試すために幾度も切られた他の死骸の片々もあった。駿府に入るには、是非その脇をとおらねばならないので、これはみな予らにもっとも不快な通路となった」(『セーリス日本渡航記』村上堅固訳)

セーリスによると、家康は元来キリシタンが嫌いであった。それ以上にキリシタン大名たちがスペイン国王の勢力と呼応して、徳川幕府に対抗することを何よりも警戒していた。家康はキリシタン信者の迫害を駿府から始めた。陰惨な弾圧と迫害が繰り返され、駿府町奉行彦坂九兵衛らが先頭に立って次々と新しい拷問のやり方が考案された。なかでも「駿府の責め苦」という宙吊り状態にした拷問は特に恐れられていたという。キリシタン信者の埋葬を許さず、火刑(火あぶり)にした。また埋葬した信者は墓から掘り出して、海に捨てたこともあった。家康のキリシタン弾圧は、ローマの皇帝ネロよりも残忍であったかも知れない。

Ⅲ 家康時代の先端技術

印刷技術

活字印刷の歴史は意外に古い。日本ではイエズス会の宣教師バリニャーノが、長崎のキリシタン学校で印刷をする必要から、洋式活字印刷機を天正18年(1590)に輸入したことに始まる。この印刷機はゲーデンベルグ式印刷機の改良型といわれ、金属活字である。ローマ字であったために、和漢字や片仮名の字

母も作られた。キリシタン信徒たちは、この印刷機によって、世界的教養を身に付ける手引きを印刷した。刊行した書物はイソップ物語や日葡辞書など、およそ30種類といわれている。

こうした印刷技術が日本に入ってきた後、豊臣秀吉が朝鮮出兵の戦利品として日本に伝えたのが「朝鮮印刷機」である。これを使った出版は、家康が駿府城に入るまで伏見で行っていた。「伏見版」と呼ばれる書籍である。一方駿府で行った印刷物は「駿河版」と呼んで区別した。「伏見版」は圧倒的に兵法書の印刷が多く、木活字を使ったのに対し、駿河版は銅活字へと技術が進んだ。駿府銅活字での出版物には、『大蔵一覧』や『群書治要』がある。

『群書治要』の印刷は、活字をたくさん使用するため、不足分の1万3千個が補鑄された。朝鮮渡来の印刷技術は、朝鮮人技術者が駿府に来て指導した。金地院崇伝の記録によると、駿府城三の丸の能舞台に印刷工房が作られていた。その場所は、現在の静岡県庁西館と総合庁舎辺りになる。

家康が亡くなるとこの画期的印刷技術は踏襲されることなく、歴史的出版事業は影を失った。その後の印刷は昔から行った版木による印刷方法へと逆戻りした。その理由は、キリシタン信者などがこの技術を使って大量出版をすることを恐れたとの見解が有力である。

大砲の生産

家康は武器としての火薬製造には力を入れた。アダムズが慶長5年(1600)にリーフデ号で九州に漂着すると、この船に積載されていた武器や火器に注目した。この船を関東に回航して、大砲の実弾射撃も実施した。さらに元和元年(1615)3月22日には、蜂須賀蓮庵に大砲の鑄造を命じた。このころ南方の朱印船貿易では、火薬の原料を絶えず調達したり、鹿の皮(湿気防止)を輸入した。

またイギリス商館から、カルベリン砲4門、セーカー砲1門、鉛6百本を購入した記録がある。オランダやイギリスには、鋼鉄棒や大砲や鉛を大量に注文していた。慶長16年(1611)には、「弾丸重量50匁(1匁は3.75グラム)で射程距離2千メートル以上の大砲を数百門用意し、大阪城には幅の広い外堀と高い城壁があったが鉄砲では届かない城郭の内部に砲弾を撃ち込んで、天守閣に命中させた。砲弾は淀君を恐怖におとし入れ、講和を結ばせる決定的要因となった」(『金属の文化史』)という。

東京都九段の靖国神社の拝殿右側に、青銅製などの古い大砲が並んでいるが、その中に「家康の大砲」が設置されている。説明によると、慶長16年(1611)家康の命令で堺の鉄砲鍛冶芝辻理右衛門が作ったもので、口径9センチ、全長

313センチである。重量は2トンあまりで、わが国の技術史上の貴重な遺物である。

『鉄砲をすてた日本人』の著者ノエル・ペリンは、日本に学ぶ軍縮と題してこの著書を著した。その中の一文を紹介する。

「日本人は火縄銃の口径を大きくすることにも、銃身の破裂をふせぐ鋼鉄を開発することにも、いちはやく成功していた。ところが(家康没後)、日本人はその後2世にわたりそれ以上の開発を進めなかった。1636年、平戸のオランダ通商使節が精巧な新式の火打石式ピストル1ダースを将軍(家光)に献上した際に、日本人は次の技術開発の課題が何であるかについて少なくとも知識は得ていた。にもかかわらず、それに関心を示さなかったのである。(このピストルの贈呈は、オランダ人が長崎の出島に移されるのを避けるために行った最後の努力であった。) —中略— 初期の日本製の鉄砲は驚くほどよくできていた。そのいくつかは、16世紀から17世紀に日本で2、3世代の期間、戦争で使用された。その後の2世紀は幕府の倉庫に眠っていたが、ペリー提督による開国後、日本で再び活発に火器が使用され始めるに及んで陽の目を見、近代日本の軍隊用の雷官付き小銃に改造された。」

日本は鎖国へと突入するにあたって、これらの最新技術から刀の世界へと逆戻りしたことになる。ペリンは、世界の歴史で軍縮をした最初の国は日本だと言っている。

鉱山開発と産金技術

関が原の戦いで勝利した家康は、国内の金山や銀山の統制を始めた。外様の所有する金山や銀山も、自分の支配下に置いた。家康が最初に接触した外国人は、宣教師のジェロニモであった。家康は彼から最新の西洋事情を聞きだした。彼は貿易によって富を増し、国内の金銀の産出量を増やして国力を強めることを知った。

ジェロニモに刺激された家康は、先に述べたフィリピン総督ドン・ロドリゴに話をもちかけ、メキシコで当時行われていた精錬技術の輸入と技術者の派遣を再三要請し続けた。メキシコから精錬技術が日本に導入されたというはつきりとした記録はないが、水銀を使ったアマルガム精錬法は慶長13年(1608)ごろすでにあつた。これがスペインから輸入されたアマルガム技術かどうかは確認されていない。しかし家康は水銀の輸入にはかなり前から注目し、これを積極的に買い漁っていたことが外国人の記録から知られることから、可能性は高い。

造船技術

家康がウィリアム・アダムズに造らせた船で、京都の豪商田中勝介と22名の水夫らに乗せてメキシコに向かわせたことは前にも触れた。田中勝介にはメキシコの最新情報を、22名の水夫には航海技術を習得する目的があった。実際どこまで日本人が航海技術を習得していたかについては、日本側の記録は皆無である。しかし日本最初の洋式帆船(120トン)が、スペイン人と日本人に乗せて太平洋を北上し、メキシコの西海岸アカプルコまで無事たどり着いた意義は大きい。

造船ではその後、仙台の伊達政宗が家康の許可を得て幕府の船大工らとともに西洋船(500トン)の造船に成功している。それが「慶長派欧使節」に乗せてメキシコに船出した「サン・ファン・デ・バウティスタ号」(日本名不詳)である。この船にはローマに向かった支倉常長を代表とするキリスト教の使節も同乗し、この船は2回太平洋往復横断に成功した。田中勝介らの快挙の4年後、つまり慶長18年(1613)のことである。このように家康は、当時の外国の先端技術を使いこなしている。

ヨーロッパ中世の代表的発明には、「火薬・羅針盤・造船技術・印刷技術」などがある。これらの技術を家康は、ヨーロッパよりやや遅れたとはいえ完全にマスターしていたことになる。これも家康の好奇心と、諸外国への対抗意識が隠されていた出来事である。

IV 家康関連年表

延徳	4年(1492)	コロンブス、アメリカに至る
天文	6年(1537)	ポルトガル人、マカオに入植
	11年(1542)	徳川家康(竹千代)、三河に生まれる
	12年(1543)	コペルニクス、地動説提唱 ポルトガル人、種子島に渡来。鉄砲を日本に伝える
	18年(1549)	フランシスコ・ザビエル、日本にキリスト教伝える (キリスト教の伝来)
	19年(1550)	ポルトガル船、はじめて平戸に入港
	24年(1555)	竹千代、元服して元信と名乗る
弘治	2年(1556)	フェリペ2世即位
永禄	1年(1558)	エリザベス1世(英)が即位
	3年(1560)	織田信長、今川義元を桶狭間にて破る
天正	5年(1577)	ドレーク(英)、世界一周に出帆 ロシア、シベリアへ進出
	10年(1582)	織田信長、本能寺にて落命(本能寺の変) グレゴリオ暦制定
	15年(1587)	駿府城の堀普請はじまる
	16年(1588)	スペイン無敵艦隊、英艦隊に敗れる
文禄	4年(1595)	オランダ、喜望峰経由のインド航路の開発に着手
慶長	1年(1596)	スペイン船「サン・フェリペ号」浦戸湾に漂着 26聖人、長崎で殉教
	3年(1598)	豊臣秀吉、死去 家康、大阪城でウィリアム・アダムズに会う 関ヶ原の戦い 東インド会社が発足
	6年(1601)	ジェロニモ・デ・ススース、京都で病死 朱印船貿易始まる
	7年(1602)	家康、マニラ総督にメキシコとの通行に日本が参加 し、スペイン人に関東に寄港地を設けることを提案 する
	8年(1603)	徳川家康、征夷大將軍となる

- ソテロ来日
- 9年(1604) 家康、糸割府制度を導入、駿府の商人栄える
 - 10年(1605) 家康、フィリピン総督に返書する
家康、リーフデ号船長ヤコブ・クワッセルナークの
帰国に際し、オランダ国王へ親書を託す
 - 11年(1606) 川辺城計画出る
 - 12年(1607) フランソワ・パジェス等と駿府城で家康に拝謁
朝鮮通信使はじまる、駿府城にて家康と会見
 - 14年(1609) オランダ国王使節来日し、家康に通商を求める
オランダ、平戸に商館を置く
ドン・ロドリゴに謁見
 - 15年(1610) ソテロ、家康の命により日本とスペインの協定書作
成。家康、「大御所派墨使節」を派遣する
 - 16年(1611) スペインの国王使節ビスカイノ、駿府城で家康に拝
謁し、ロドリゴ帰国のお礼を述べる
オランダ商館長スペックス、駿府城の家康に拝謁。
家康、「南蛮世界地図」を駿府城で見る
 - 17年(1612) 駿府城下で、キリシタン岡本大八事件起こる
キリスト教禁止令発布
(家康によるキリシタン弾圧、駿府から始まる)
ビスカイノ、金銀島を探し廻る
 - 18年(1613) キリシタン弾圧、京都で見せしめ、大名領地にも広
める。支倉常長、ローマに派遣
イギリス国王使節(セーリスほか)、駿府城で家康に
拝謁。支倉常長、ソテロらスペインへ赴く
 - 19年(1614) 大坂冬の陣
高山右近らキリシタン百十数人を海外追放
 - 元和 1年(1615) 大坂夏の陣、豊臣家滅亡
 - 2年(1616) 徳川家康没す
幕府、キリスト教弾圧をエスカレートする
 - 6年(1620) ウイリアム・アダムズ没す
 - 8年(1622) ソテロ、禁令を犯して日本に渡航する
 - 寛永 1年(1624) スペインとの通商が途絶
ソテロ、長崎で火刑に処される
 - 7年(1630) 山田長政、シャムで毒殺される
 - 12年(1635) 駿府城、天守閣焼失する

鎖国令が出される

IV 参考文献

- 『東方見聞録』 マルコ・ポーロ著、青木富太郎訳 社会思想社 1983. 2
- 『日本にきた最初のイギリス人 ウリアム・アダムズ 三浦按針』
P. G ロジャーズ著、幸田礼雄訳 新評論 1993. 9
- 『通辞ロドリゲス 南蛮の冒険者と大航海時代の日本・中国』
マイケル・クーパー著、松本たま訳 原書房 1991. 1
- 『日本史』 史学会編 山川出版社 1951
- 『日本王国記；日欧文化比較』 アビラ・ヒロン、ルイス・フロイス著 岩波書店
1991. 11 大航海時代叢書
- 『日本キリシタン殉教史』 片岡弥吉著 時事通信社 1979. 12
- 『セーリス日本渡航記』 アーネスト・サトウ校訂加注、セーリス著、村川堅固訳
雄松堂書店 1980. 2 新異国叢
- 『ジパングの王様 徳川家康 葵三代と静岡』 黒澤脩著 静岡新聞社 2000. 2
- 『徳川三代天下人への賭け』 高野澄、百瀬明治編 アートダイジェスト 1999. 11
- 『決定版 戦国時代考証総覧』 新人物往来社 1997
- 『鉄砲とその時代』 三鬼清一郎著 教育社 1981
- 『ビスカイノ金銀島探検報告』 異国叢書所収

V 最後に

当資料は、国際歴史フォーラム「17世紀の世界と大御所・家康」の時代背景を理解していただくために、参考資料として、著書『ジパングの王様 徳川家康 葵三代と静岡』の中からその一部を抜粋し作成したものです。

したがって、講師の方々の考え方や意見を集約したものではないこととお断りいたします。